

身近材を用いて生み出す造形作品の可能性

～図工の教室『いたらいいな！あんなサンタこんなサンタ』に関する考察～

佐 伯 育 郎*

The Prospect of Artworks by Using Familiar Materials:
2012 Art Majors' Workshop "Why Not Produce Your Original Santa Claus?"

Ikuo SAEKI*

はじめに

毎年、筆者は児童教育コース図画工作専修、幼児教育コース図画工作ゼミの学生とともに図工ワークショップを企画・実施している。図工ワークショップのテーマは「架橋」である。地域と大学、理論と実践、授業と実習、実習と現場、美術教育と環境教育との架橋を模索している。

筆者は、①参加者・学生スタッフともに好評であり、今までの取り組みには成果があった②地域貢献になるだけでなく、学生の成長にもつながるため、今後も継続・実施していきたい③考察を通して成果と課題を明らかにし、反省点を改善してよりよい取り組みにしていきたい④題材開発・教材研究を通して、身近材を活用して生み出す造形作品の可能性を模索していきたい、と図工ワークショップについて評価・展望している。

平成24年12月8日（土）に実施した図工の教室『いたらいいな！あんなサンタこんなサンタ』の成果と課題を検討し、身近材を活用した造形作品の題材開発・教材研究について考察する。

1. 図工ワークショップの詳細

(1) 図工ワークショップのねらい

今年度のねらいは、「サンタクロース作りを通して、クリスマス・おもちゃ・造形材料を見つめ直す」である。

「クリスマス・おもちゃを見つめ直す」について述べる。子どもたちにとってクリスマスといえば、市販のおもちゃを保護者に買ってもらったり、きらびやかな市販の飾りで自宅を彩ったりすることが一般的である。そのような状況の中、子ども自身による手作りのものを飾って楽しむクリスマスがあってもよいのではないかと考えた。他者から与えられるおもちゃばかりでなく、自分の手でおもちゃを作り出すこともできることを知って欲しいという願いもあった。ワークショップのタイトルには、多種多様なサンタクロースがあってもいいのではないかという問題意識、既成概念にとらわれず想像力・創造力を働かせてオリジナルのサンタを作って欲しいという意図が込められている。

「造形材料を見つめ直す」について述べる。身近材を再利用した造形活動の面白さ・楽しさを参加者に知って頂くことがねらいである。身近材を再利用したサンタ作りを通して、既製品を購入しなくても、クリスマスを楽しむ方法があ

* 本学准教授

ることを知って頂くことを意図した。完成した作品を自宅に飾ることによって、通常とは一味違う手作り感のある年末・年始、家族団欒の時間を味わって頂くことがねらいである。

(2) 図工ワークショップの題材

実施1年目の平成19年度から一貫して廃材などの身近材を主材料として活用している。6年目の今回は、一昨年・昨年と同様段ボールを主材料に選び、サンタ作りに取り組んだ。店舗から収集した段ボールを再利用した。軽量性、強靱性、可塑性などのメリットがあり、造形材料としても魅力的である。

小学校学習指導要領・図画工作科の内容は、「A 表現」と「B 鑑賞」の2領域で成り立っている。「A 表現」には、「(1) 造形遊び」と「(2) 絵や立体、工作に表す」がある。今回のサンタは、「立体に表す」内容である。絵や立体は、見たこと、感じたこと、想像したことなど、イメージを表現するものであり、心象表現と呼ばれる。完成作品は非機能的なものであり、アートに分類される。サンタを飾ったり、遊んだりして楽しむことはできるが、サンタ自体に用途・機能はない。

昨年の題材「でこふれ」は写真立てであり、「使う」「飾る」工作である。写真を入れる機能、写真を飾る用途がある。工作は、作りたいものとそのもの持つ使用目的、用途、条件、材料の特性などとの関係を吟味して行う合目的的活動であり、適応表現と呼ばれる。完成した作品は機能的なものであり、デザインに分類される。これまでの図工ワークショップでは、工作を取り上げることが多かったので、今回は立体を選択した。

立体を選択したのは、現在立体作品が注目されていることも理由の1つである。注目を浴び

ている国内の立体作家には、舟越桂、三沢厚彦、棚田康司などがおり、美術館での単独の展覧会が開催されている。作品集などの関連書籍も出版されている。美術雑誌でも立体作品の特集が組まれたり、人形の展覧会も開催されたりしている¹⁾。おもちゃについても、アニメーションや特撮作品などのキャラクターを立体化したフィギュアが注目されており、子どもだけでなく広く大人にも受け入れられている。中には、子どものおもちゃの範疇を超えたものもあり、非常に高価なフィギュアも販売されている。

立体表現は、材料に関する知識、高い技術と専門性、深い教材研究を必要とするものが多く、図画工作科の授業においては教師から敬遠されがちな題材である。しかし、立体表現には量感(ボリューム)、動勢(ムーヴマン)、均衡(バランス)といった構成要素があり、絵・版画などの平面表現にはない教育的意義がある。これまで立体表現といえば、粘土、石材や木材などの抵抗がある材料を使用することが一般的であった。準備・後片付けに手間がかかり、教室や服装が汚れるなどのデメリットもある。抵抗を軽減するために、セット教材化され販売されているものもある。①セット教材を使わなくても身近材を活用して立体表現をすることができる②身近材を活用して高価なフィギュアを買わなくても自分で作ることができる、以上2点が本題材による提案である。

初等教育学科児童教育コース図画工作専修の2・3年生、幼児教育コース図画工作ゼミの3・4年生のゼミでは、10～12月に参考作品を作成した。毎年、学生・筆者ともに題材開発・教材研究を行っている。筆者は、学生より先に夏期休業中の9月から教材研究を始めた。サンタクロースを作る前に、段ボールとモールを組み合わせた素体(素になる人形)から作り始め

た。筆者は、9体の素体と1体のサンタを作成した(図1)。立体表現の構成要素の中から均衡(バランス)に着目し、自立出来る素体とサンタを目指した。段ボールの特性の中から軽量性と中芯の穴に着目し、モールを通して骨組にすることにした。筆者は当初、かろうじて自立可能な素体から、より人間らしいプロポーションの素体を目指し、試行錯誤しながら7体作った。その後、パーツ数が少なく、子どもにも取り組みやすいようにするため、デフォルメした素体を2体作った。最終的に、6体目と9体目を今回のワークショップ用に採用した。素体は、「段ボール」「モール」「ドール」を組み合わせ「ダンドール」と命名した。図画工作科教科書に掲載されていないオリジナル題材である。「ダンドール」には、①立たせる“スタンディング・タイプ” ②座らせる“シッティング・タイプ” ③吊り下げる“ハンギング・タイプ”の3種類がある(図2)。学生たちは、実に多様なサンタを作成した(図3～6)。今回のワークショップでは、①スタンディング・タイプと②シッティング・タイプのいずれかを参加者に選択させた。

(3) 図工ワークショップの内容

図工ワークショップは、13:30より開始した。クリスマスの曲を流し、司会進行の児童教育コース図画工作専修2年生が開会を宣言した。筆者が参加者に挨拶をした後、学生からスタッフ・コーナーの紹介を行った。

会場には、3コーナーを設けた。作品を装飾する材料・用具を置いた「デココーナー(デコレーション・コーナー)」、飲み物を置いた休憩用の「ほっとひといきコーナー」、学生・筆者の参考作品を展示した「ひみつのコーナー」である。「デココーナー」は、机を利用して会場に

2箇所用意した。「ひみつのコーナー」は、作品紹介まではついたてによる目隠しを施した。

コーナー紹介後、鈴の音が会場に響き、ソリに乗ったサンタとトナカイが登場し、会場を沸かせた(図7)。参加者に挨拶をした後、「今年の年末は、君たちみたいな良い子がたくさんいて忙しいので、サンタさんの仲間を作ってくれるかな? 楽しいサンタをたくさん作って、手伝って欲しい!」と述べて、参加者に対して動機付けを図った。図工専修2年生が、教具を用いてサンタの作り方を紹介した(図8)。ひみつのコーナーに置いていた参考作品を紹介した後、作品づくりを開始した。サポート役の学生スタッフがついて、参加者を支援した。

中盤に休憩を10分間設け、参加者にほっとひといきコーナーを利用して頂いた。

作品完成後、アトラクション「みんなであうたおう!!」を行った。幼児教育コース図画工作ゼミ3年生の楽器演奏(キーボード・鈴など)とリードによって「ジングルベル」を全員で合唱した。

アトラクション終了後、サンタ・トナカイ、学生スタッフの代表者から参加者に向け感謝の言葉を述べた。筆者が挨拶をした後、全体記念写真を撮影した(図9)。作品が完成した参加者から、サンタ・トナカイ、担当学生も交えて、ソリを囲んで家族毎の記念写真を撮影した(図10～12)。

その後、参加者にアンケートの回答をして頂いた。参加者を会場から見送り、予定をオーバーすること約10分、16:10頃に全日程を終了した。

(4) 図工ワークショップの広報活動

事前の広報活動として、本学HP上にワークショップの案内を書写書道専修との合同で掲載

した。本学附属幼稚園や近隣の小学校などにおいて、ワークショップのチラシを配付した。

ワークショップ終了後、筆者と学生からの保護者宛のお礼状、サンタとトナカイから子どもたちへの手紙、当日の写真を同封し、参加者宛に送付した。「いたらいいな！あんなサンタこんなサンタ 参考作品展」と題して、学生・筆者の作品を、1号館3階の絵画室A（135教室）の入口に展示した（図13）。

2. 図工ワークショップの成果と課題

参加者・学生スタッフ対象のアンケート結果を根拠にして、昨年度と比較しながら考察する。図工ワークショップの成果と課題について、6つの観点から検証する。

(1) 事前の活動

昨年度の課題は、①教材研究に時間がかかり過ぎた②学生スタッフ間のコミュニケーションが不足していた、の2点であった。

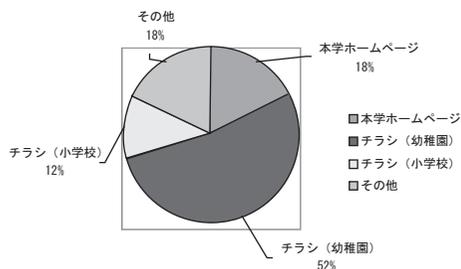
教材研究には、成果があった。肯定的な意見では、「サンタをそれぞれ1体は作っておくことで、作り方の説明もスムーズに行うことができた。（図工専修3年）」という内容の記述が多かった。教材研究に時間がかかり過ぎたという点は克服できた。逆に「サンタクロースを作る時間が1日しかなかったので、もう1日欲しかった。（図工ゼミ4年）」「私は事前に立つサンタを作っていましたが、子どもは座るサンタを作ったので、うまく説明してあげられませんでした。教える側がしっかり理解した上で説明した方が良いと思うので、事前に全パターン作っておいた方が良いと思いました。（図工ゼミ4年）」と改善点を述べた学生もいた。幼児教育コース図画工作ゼミ4年生の学生は非常に多忙であり、ワークショップ2日前に参考作品を1体作るだけで

精一杯だった。今後は、余裕を持って教材研究に取り組みたい。

「教具は、アイデアがたくさん出てよかった（カッター、ソリなど）。（図工専修2年）」という感想があったように、参加者にサンタの作り方を説明する際の教具は充実していた。示範用の大きなカッターと定規、大きなギャルサンタは、図工専修2年生が自発的に作ったものである（図14）。台車をベースにして段ボールで装飾したソリも、図工専修2年生の作品であった。

ワークショップ前日を利用して会場設営、当日午前中を利用してリハーサルを行った。授業などがあり、参加できなかった学生もいたが、手際よく行うことができた。「会場設営などは、今年は早めに終わらせることができ、段取りもよくできていたと思う。（図工専修3年）」「リハーサルも変更点（改善点）が見付かって良くなって、やった意味があった。（図工専修3年）」「リハーサルは何度もやったので、安心して取り組むことができた。（図工専修2年）」という感想があった反面、課題も認められた。「先輩と事前に話し合うなどできたらよかった。（図工専修2年）」と述べていた学生もいた。コース・学年が異なり、ゼミの時間帯も違うので、スタッフ全員でリハーサルを行うことはできなかった。しかし、昨年度よりも学生同士での交流を持つ機会が増えてきた。学生が企画した食事会なども増えたり、他学年のゼミに自主的に参加したりするなど、交流が自然に増えてきた。そのことが、事前準備にも反映された。

ワークショップに参加したきっかけを参加者に聞き、グラフ化した（グラフ1）。これまでは、本学エクステンションセンター主催・公開講座のチラシに案内を掲載し、新聞の折り込み広告として広島市安佐北区・安佐南区を対象に広報活動を行っていた。今回は、本学ホームページ、



グラフ1 【ワークショップ参加のきっかけ】

チラシの配付のみによって広報活動を行った。定員20組には満たなかったが、16組の参加があった。総数は51人（大人17人、子ども34人）であり、参加者不足を危惧していたが、十分確保できた。今後も、広報活動に力を入れる必要がある。

(2) 環境設定、当日の運営、題材

昨年度の課題は、①「デコナー」が混雑した②お菓子・ジュースに不公平が生じた③時間が足りず、作品の発表・鑑賞を削除した、の3点であった。デコナーについては、①デコナーの高さを低くし、子どもにも取りやすくする②各テーブルに持ち帰りやすいようにトレイを用意する③あらかじめ材料を小分けして各テーブルに置く、の3点を試みたいと考えていた²⁾。

「今年はデコナーを広いところに設置したため、混雑することもなく、楽しくデコレーションできていたと思う。(図工専修3年)」という意見があった。上記3点の改善案を実施しなかったが、「デコナー」の場所を変えることで混雑を回避できた。材料を取りに行くためのトレイも用意しなかったが、各テーブルに置いていたゴミ箱（プリントを再利用して作ったもの）で代用できた。

「席が少し狭くて、休憩中の移動などが大変そうだった。(図工ゼミ3年)」 「机の感覚が狭かつ

たので、子どもと一緒に造形活動をしにくかった。できれば向かい合わせで、関わられたらよかったです。(図工ゼミ3年)」という意見もあった。座席の配置などの環境設定を再考する必要がある。この点については、学生が改善案を提案したので、次年度に生かしたい。

お菓子の配付については、改善できた。事前にビニール袋に入れておき、来場時に1人ずつにお渡しした。飲み物については従来通りコーナーに用意し、中盤の休憩時間で主に利用して頂いた。コーナー担当学生の働きもあり、問題は生じなかった。「ほっとひといき Tea Time よかったです！(参加者・母親)」 「お茶やお菓子が用意されていて、小さい子には長時間はどうか？と思っていたのですが、休憩があることでグズグズすることもなく、スムーズだと思っています。小さな子には、お茶タイムがとっても必要です!!お気遣いありがとうございます。(参加者・母親)」という参加者の回答があり、コーナー・休憩の設定は適切であった。

当日の運営は、滞りなく進めることができた。しかし、一昨年・昨年同様アトラクションとして行う予定だった「家族ごとの作品発表」を削除することになった。終了時間も10分オーバーした。「当日は、子どもたちの進み具合が思ったより遅く、時間設定がまずかったことが分かった。(図工専修2年)」という意見もあり、時間配分が新たな課題となった。ねらいを絞り、ワークショップ1回につき、1題材1アトラクションが適切であろう。

司会進行、サンタの作り方の説明はよい評価であった。「司会進行は、それぞれが自分流に進めていけたと思う。みんなで協力して、フォローし合うこともできた。(図工専修2年)」 「2年生の司会全体とてもよかった。(図工専修3年)」という感想があった。しかし、経験豊富な

4年生からは、「カッターなどの使い方の時、わかりやすく『ない!』など言っていたのはよかったけど、危険なことなので、もっと丁寧に伝えた方がよかったかなと思いました。(図工ゼミ4年)」「声が少し小さかったように思います。子どもたちの興味が湧くように問いかけたり、ペープサートを使って楽しくしたりすると良かったかなと思います。でも、緊張もあったと思うんですけど、頑張っているなと思いました。(図工ゼミ4年)」という意見もあった。

アトラクションについては「司会やアトラクションなどは元気してくれたので子どもたちもとても楽しそうだった。1つ言うならば、しっかりと注目させてから始められると、もっと良くなったのではないかと思う。(図工専修3年)」という感想があった。反省点・改善点として「アトラクションの歌は、知らない子どもたちもいたようなので、スタッフで1回歌ってあげたらいいのではと思います。(図工専修2年)」「歌うだけでなく、前に出てもらったり、楽器をやらせてあげたりすればよかった。(図工専修3年)」という意見もあったので、今後に生かしたい。

他には、「早く来てくださったご家族が退屈せずに待てる場を設けた方がよかったのではないかと思う。子どもは集中力が長くはないので、特にそう思った。(図工ゼミ3年)」という意見もあった。ワークショップ開始前の時間にも、何か一工夫必要である。以前は、おもちゃコーナーを設置して子どもたちに遊んでもらっていた。年々参加者が増え、コーナーのスペースを確保することが難しくなった。机上で取り組める活動の導入を考えたい。「『どんなサンタに来て欲しい?』など、自分の作りたいサンタを想像させる時間も必要だと思う。(図工ゼミ4年)」「大きなギャルサンタを前に置いていたため、そ

れを真似して同じように作ろうとしていた子どももいた。もっと、あんなサンタこんなサンタを強調したらよかったかもしれない。(図工専修2年)」と述べていた学生もいた。他者の作品から学ぶこともあるが、参加者への動機付けを高め、自分の作りたいサンタを明確にさせる工夫も必要であった。

今回の題材であるダンボールで作るサンタコースは、好評であった。「段ボールという身近ながら使い勝手の良いものを題材としたことで、家に帰ってもできる、発展したこともできるなど、ソシオに留まらず様々なことができる。(図工専修2年)」「参考作品を、保護者の方がとても感心していた。(図工専修3年)」という肯定的な感想・意見が多かった。「決められた題材で、それぞれの個性を生かし、作成することができるのでよかった。(図工専修3年)」「去年と同じ段ボールでも、違うものが作れてよかった。(図工ゼミ4年)」「家でもまた作れるし、学校や園でも友だちに見せてあげると、また楽しめると思った。クリスマスに向けて今回のものを作ったことで、子どもたちのクリスマスへの期待も膨らんだと感じる。(図工ゼミ4年)」という感想からも、題材の選択が適切であったことがうかがえる。参加者は、親子ともに工夫をして作品づくりに取り組んでおり、多様なサンタが完成した(図15~16)。

(3) 使用した用具と学生による支援

用具、特にカッターについては課題が認められた。「私の担当したお子さんは5歳で、型紙を作るのが難しそうで、私がかかり手を貸してしまいました。型紙を切り、段ボールを切ることを優先するのか、飾り付けを優先するのか、活動のメインを考えて事前の用意をどこまでするのか考えた方がいいと思います。(図工ゼミ4

年)「カッターを使ったことがあるかどうかを聞くべきだった。(図工ゼミ4年)」「題材はパーツが多いかなと思いました。年少さんには、カッターが難しかったかなと思いました。(図工ゼミ4年)」と述べていた学生もいた。今回のサントは、昨年の「でこふれ」よりも切るパーツ数が多く、特に低年齢の子どもは段ボールを切るのに手間取っていた。

しかし、学生は教育者・保育者としての素養を発揮し、参加者に対する支援を適切に行った。「担当の子どもが4歳だったので、はさみで簡単に切れるところだけやってもらって、カッターや切るのが難しいところは自分でやりました。クラフトパンチが難しいようだったので、一緒に押してあげました。(図工専修3年)」「初めてカッターナイフを使うと言っていたけれど、止めることなく、殆ど自分の力でできるようにした。(図工専修3年)」「カッターを使うのが初めてだったようで、もう一度危険なもの、刃に手を近付けたら危ないことなど伝えました。その子の手を持ちながら一緒に行いました。しかし、力の入れ方が難しいようだったので、『先生が切ってもいい?』と聞いて『いいよ』と行ってくれたので、私がカッターで切り、少し残して、そこをはさみで切ってもらうことにしました。そうすることで、自分も切った、できたという思いを持ってもらえるかなと思いました。(図工ゼミ4年)」と述べていた学生もいた。できるところは子ども自身にさせて、難しいところは補助するという対応から、講義・演習・実習などの学びが生きていることがわかる。子どもの実態・年齢・発達段階に合った対応を臨機応変に実践していたことがうかがえる。

「あらかじめ軽くカッターで跡や切り込みを入れておき、はさみでも楽に切れるように工夫したら、活動しやすかったかなと思う。(図工ゼミ

4年)」という提案もあった。今後の参考にしたい。

(4) 参加者とのコミュニケーションによる学生の学び

図工ワークショップは、学生の実践力を培う貴重な場である。2年生にとっては2年次の観察実習と3年次の本実習とをつなぐものであり、3・4年生にとっては3年次の本実習と卒業後の教育・保育の場とをつなぐものである。

「お母さんも、女の子の可愛いサントを作っていて楽しそうでした。2人とも小学生で、ロボットサントと女の子を作っていました。ロボットサントの子はすぐに作り終わっていたので『シールとかもあるけど見に行く?』『後ろさみしくない?』などと声掛けすると、どんどん材料を持って来て、途中2人で作るという感じで楽しかったです。女の子のサントを作る子は、丁寧で自分の考えがある子だったので、感想を伝えたり、見守ったりするようにしました。(図工ゼミ4年)」という感想もあり、参加者とコミュニケーションを取り、楽しく活動した様子がうかがえる。

学生の成長も認められた。「最初なかなか意思表示がなかったため、こちらから積極的に働き掛け、意見を引き出すようにした。後半は、次はこうしたいということが言えるようになっていた。(図工専修2年)」「教育実習後ということもあり、目線を合わせ、子どもの意見も聞きながら活動することができた。(図工専修3年)」「お母さんがカッターを使っている間に、子どもとデコを見に行ったり、子どもの園や家でのことなどを聞いたり、たくさん話をしたりして、退屈しないようにした。(図工ゼミ3年)」「無言で関わらないようにするなど配慮した。(図工ゼミ3年)」「大人しい子だったので、お話ししたり、

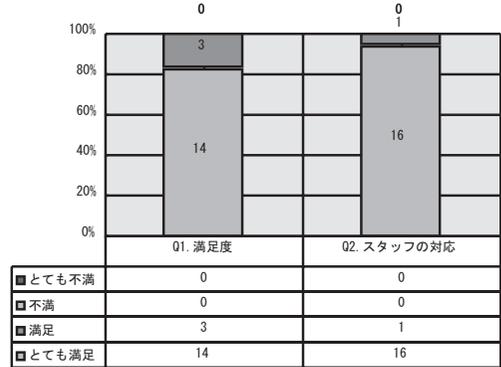
ふれ合い遊びをしたりして、少し仲良くなれて良かった。(図工ゼミ3年)」という回答から、参加者との関わりを通して学生のコミュニケーション能力が向上したことがうかがえる。

「教え方、やりやすくさせる方法は、お母さんの方がよく知っておられたので、見て学んだ(例：大きい紙は小さく小分けする、直線しか切れない子には示してあげる……など)。(図工専修2年)」「保護者の方が、子どもが自主的に楽しんで作れるような声掛けをされており、夢中になって取り組んでおられたのが印象的でした。私は『何色にする?』『何付ける?』と聞いて、一緒に行動し、見守るくらいしかできませんでしたが、それも大切だと気がきました。(図工ゼミ3年)」と述べていた学生もいた。これらの回答から、参加者の様子を観察することで得られる学びもあることがわかった。

(5) 参加者の満足度

アンケートの「Q2. 図工のワークショップの満足度はいかがでしたか?」「Q3. 学生・教員など、スタッフの対応はいかがでしたか?」という設問に対して、「とても満足 満足 不満 とても不満」の4段階で参加者に回答して頂いた。グラフ化した結果、「とても満足 満足」のみの回答であり、昨年度と同様満足度は高かった(グラフ2)。

「Q6. ご意見・ご感想・改善点などをお書きください。参考にいたします。」という設問に対しては、次の回答を得た。「また機会があれば参加したいです。年少の娘にも、殆ど自分で作らせるような援助なさったお姉さん先生！すばらしいです。お疲れさまでした。ありがとうございました。おかげで母も工作をゆっくり楽しみました。(参加者・母親)」「いつもいろいろな企画をしていただき、いつも参加させていただ



グラフ2 【ワークショップの満足度】

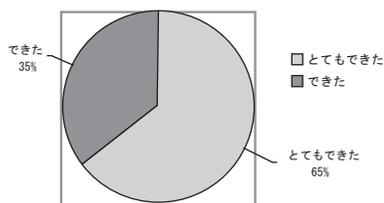
ています。今後も楽しみにしています。ありがとうございました。(参加者・母親)」「たくさんのデコレーションがあり、家ではなかなかできない体験ができました。他の方の作品も素敵でした。子どものイメージが広がったのではないかと思います。(参加者・母親)」という記述があった。学生スタッフも「ワークショップ自体、子ども受けがとてもよかった。(図工専修3年)」と述べており、手応えを感じたようである。

反省点・改善点は、次の回答である。「作品がもう一回りか二回り大きいと、幼児には作業しやすいように思いました。はさみやカッターを使う細かい作業に慣れていないので、もう少し大きいとダイナミックに作れたかなあ(顔の表情など)と思いました。(参加者・母親)」という回答があり、子どもの発達段階と作品のサイズとの関係についても検討する必要があることがわかった。「とても楽しい時間でした。机に用意してあったスティックのりが3本とも使い切っていたのが少し残念でしたが……。カッターの使い方をしっかり教えてくださったので、初めてのカッターがこの教室でよかったと思いました。ありがとうございました。(参加者・母親)」という回答があった。材料・用具の中身・容量などについても、今まで以上にきめ細かく点検しておく必要がある。

(6) ねらいの達成度

「サンタ作りを通して、クリスマス・おもちゃ・造形材料を見つめ直す」というねらいの達成度について質問した。「Q4.今日の図工ワークショップのねらいはいがかでしたか?」という設問に対して、「とてもできた できた できなかった 全くできなかった」の4段階で回答して頂いた(グラフ3)。

主な理由には「この時期ならではの題材で、クリスマスを意識することができました。至れり尽くせりで、かえって申し訳ないくらいでした。材料もふんだんにあり、あり過ぎて迷うくらいでした。(参加者・母親)」「おもちゃを作ることは、なかなか家ではできないので、このような機会を通じて子どもたちがおもちゃって作れるんだってことを知ることができてよかったです。(参加者・母親)」「手作りのおもちゃなど作ることがなかったため、手作りの良さを実感できた。目的は皆同じサンタ作りだが、個性が出て様々なサンタが出来上がりよかったです(参加者・母親)」「アイデア次第で、いろんなものが作れるのが楽しかった。型にはまらずに、自由にやらせてもらえてとても楽しかった。(参加者・母親)」「もともと工作、細かい作業が大好きな子で、今日はとても楽しみにしていました。(附属)幼稚園でも、手先を使うことに力を入れておられる。集中力・考える力を高めるためにも、子ども自身興味を持ち、成長してもらいたいと思います。(参加者・母親)」「幼稚園児には、少し難しいかな?と初めは思いましたが、お姉



グラフ3 【ワークショップのねらいの達成度】

ちゃん先生のおかげで、ゆっくり教わることができ、親の私もゆっくり作ることができ、よい時間となりました。デコナーにもたくさんものが置かれていて、決められたものではなく、自由に選択でき、一人ひとり違うサンタができたのがよかったですと思います。(参加者・母親)」というものがあつた。これらの回答からも、所期したねらいは達成できた。

図工ワークショップから3週間後、参加者から手紙が届いた。学生・筆者に対する感謝の言葉、帰宅してからもサンタを装飾したこと、親子の作品を並べて飾っていることなどが述べられていた。子どもの一言も直筆で添えてあり、スタッフ一同感激した。

3. 図工ワークショップの成果・課題・展望

題材開発・教材研究など事前活動にも成果があつた。時間配分に課題はあつたが、当日の運営は円滑にできた。参加者の満足度、ねらいの達成度も高かつた。コミュニケーション能力の向上など、学生の成長にもつながつた。以上の成果は、従来と同様であつた。新たな発見として、参加者の様子を観察することで得られる学生の学びもあることがわかつた。

昨年度の課題①デコナーの配置②材料・お菓子などの配付方法、については改善できた。③相互鑑賞を行う場面については改善できず、次年度以降に持ち越しとなった。④筆者のゼミである児童教育コース図画工作専修、幼児教育コース図画工作ゼミでの学生間のコミュニケーションは、昨年度よりは改善されたが、今後も向上させる必要がある。

今年度の課題としては、①1題材1アトラクションにして焦点化する②作品のパーツ・サイズなどを検討して、子どもにも取り組みやすくする③時間配分を検討して、作品を作る時間を

できるだけ長く設定する④作品づくりの動機付けを高める工夫をする⑤開始前の時間に工夫をする、などがあげられた。反省点は、今後に生かしたい。

ささやかではあるが、図画工作専修・ゼミの教育・研究活動を参加者に知って頂き、地域に還元することができた。図工ワークショップの意義や独自性も明らかになってきた。3年間、段ボールを主材料とした題材開発・教材研究を行った。段ボール1つとっても、造形材料としての魅力、題材化の可能性は尽きることがない。身近材を活用した作品の題材開発・教材研究の可能性をさらに模索していきたい。今後も、「架橋」をテーマとした図工ワークショップを実施していきたいと考える。

謝辞

図工の教室にご参加の皆様、ご協力くださいました

学園統括部、初等教育学科、関係者各位に心より感謝いたします。ありがとうございました。

参考文献

- 若元澄男編集『図画工作・美術科300の基礎知識』明治図書 2000年
福井凱将・小平征男・佐々木宰編集『小学校 図画工作科教育の基礎 図工指導のエッセンス』三晃書房 1997年

註

- 1) 「月刊アートコレクターズ 2012年10月号」(生活の友社、2012年)では、「こんなに楽しい!! 最新立体アートの世界100」と題して、立体作品とその作家を紹介している。「芸術新潮2012年10月号」(新潮社、2012年)では、東京・グランドプリンスホテル新高輪で開催された「DOLL EXPO 2012 大人形博」についての記事の特集している。立体作品に対する関心が高まっている状況の一端がうかがえる。
- 2) 詳細は、佐伯育郎「図工の教室『つくってかざろう! とっておきの1まい』」(『広島文教教育 第26巻』広島文教教育学会、2012年)所収参照のこと。

このページには写真が8枚あります。

- ・ 図1：著者が作った「ダンドール（素体）とサンタ」
- ・ 図2：3タイプの「ダンドール」
- ・ 図3：学生のサンタ（スタンディング・タイプ）
- ・ 図4：学生のサンタ（スタンディング・タイプ）
- ・ 図5：学生のサンタ（シッティング・タイプ）
- ・ 図6：学生のサンタ（シッティング・タイプ）
- ・ 図7：サンタクロースとトナカイ登場
- ・ 図8：図工専修2年生による作り方の説明

このページには写真が8枚あります。

- ・ 図 9 : 全体記念写真
- ・ 図10 : 家族毎の記念写真
- ・ 図11 : 家族毎の記念写真
- ・ 図12 : 家族毎の記念写真
- ・ 図13 : いたらいいな！あんなサンタこんなサンタ参考作品展
- ・ 図14 : 図工専修2年生が作成した教具
- ・ 図15 : 参加者のサンタ
- ・ 図16 : 参加者のサンタ